

平成 28 年度大学院教育学院修士課程入学試験問題

日本語

(100 点満点)

以下の問題のすべてに答えなさい。

問題 1

課題文 1 を読み、以下の問に答えなさい。なお、課題文の筆者は東京の商業高校の教諭、朝子は筆者が担任する高校 1 年生、広美は前年に筆者が担任していた高校 3 年の生徒（当時。後に中途退学）である。

問 1

傍線(1)のような考えは、朝子に対するどのような期待につながっているか。100 字以内で述べなさい。

問 2

傍線(2)「朝子が“カスガイ”^{注)}の役割を 10 年あまりも果たしつづけてきた」とは
どういうことか。100 字以内で答えなさい。

注) カスガイ (鋸) とは、「建材の合せ目をつなぎとめるために打ち込む両端の曲がった大釘」である。ここから、「両者の間をつなぎとめるもの」の意味にも用いられる。

問題2

課題文2を読んで、以下の問に答えなさい。なお、文中の「精神薄弱」とは今日では法令上「知的障害」とされるが、課題文では著者である糸賀が使用したかつての用語をそのまま用いてある。

問1 傍線(3)「彼らの純粹さにカブトを脱いだ」(カブトを脱ぐとは「降参する」の意)とあるが、「彼ら」は近江学園の先生たちをどのように降参させたのだろうか。60字以内で答えなさい。

問2 日本の「精神薄弱児教育の父」と呼ばれる著者の糸賀一雄は、「この子らを世の光に」という有名な言葉を残した。「この子らを世の光に」とは、「精神薄弱な人たちの眞實な生き方を世の光にして、援助する人々が人間の生命の眞實にめざめて、救われていくこと」を願う言葉である。

それでは、修学旅行のエピソードの中で、両足が不自由な研ちゃんを助けた人々の「人間の生命の眞實」へのめざめとは何だろうか。あなたの考えを150字以内で書きなさい。

出典 吉田和子『愛は教えられるか 高校生の「愛と性」を生きる』高文研、一九八三年、
七二七七頁(一部改纂)

出典 糸賀一雄著『この子どもを世の光に』柏樹社、一九六五年、一五三―一五六頁（一部改変）